



相談センターだより

第10号 2012. 5. 発行

車窓の風景

先日、久しぶりに列車に乗る機会がありました。緑が美しい路線です。偶然ホームで出会った知人と乗り込み、各駅停車ならではのゆっくりとした時間を味わいました。いくつかの駅を過ぎ、列車は一段と緑が深くなる渓谷にさしかかりました。

「わあ、きれいねえ、この風景!」「そうねえ…、でも崖が崩れそうでなんだか怖い。」

私は知人の返事に少々戸惑いました。どこに崖があるのだろうか…。よくよく見ると、確かに赤い岩肌の絶壁が緑の間にちらりほらり。それがなお美しくもありました。

知人は職場で大きな問題を抱えていました。役職についていた彼女はその矢面に立ち、信頼していた仲間の裏切りで窮地に立たされていました。大きな崩壊の陰に、小さな友情のほころびがあったのでしょうか。車窓から見える景色の中に彼女の隠れた不安が映し出されたように思いました。

人は1歳後半頃から鏡を見て、そこに映る姿は自分だと認識するようになるといわれています。やがて、鏡に映して自分をながめるだけでなく、周囲の人の反応の中に自分を映し出すことを覚え、外界に自分を映して自分を知る能力を磨いてゆきます。他者を通して自分を知る、人間らしい能力です。

しかし、自分を映し出した鏡や人々が、果たしていつも本当の自分を正しく映しているかという、大いに疑問が沸いてきます。歪んだ鏡もあれば、色のついた鏡もあるように、人の反応もその日の気分や好みに左右され、少々気まぐれなところがあるからです。知人のように、意識していない内面の怒りや悲しみが映し出され、それと知らずに相手の反応を自分勝手に見ていることもあるでしょう。ですから、時には目を閉じて、何ものにも映されない自分を見ることも必要なのかもしれません。体の疲れや快さ、心に満ちている悲しみやよろこび、ひとつひとつそのままゆっくり受けとめる、そんなひと時です。

車窓の風景、今日はどうな風に見えるのでしょうか。

相談員 成願めぐみ

一口メモ

「こどもは涙で命令し、
聞いてもらえないと
わざと自分を傷つける」
(スタンダール)

自分の言うことが受け入れられないと、こどもはよく泣きます。涙によって精一杯の自己主張をしているのです。それでもなお、わかってもらえないと自らを傷つけ、おとしめるという方法をとってまで、大人の理解を求めます。数年来、増加が懸念されている自殺などは、その悲しむべき典型と思われる。非行化等も、何かを訴えたいための裏返しの行動という場合が少なくありません。こどもたちの涙や傷の真の意味、ことばにならない声に、きづいてあげてください。

洞察する眼、傾聴する耳、共感する心のもち主こそ、真の大人といえます。

相談員 久留一郎